



国指定史跡

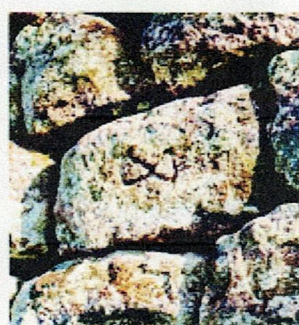
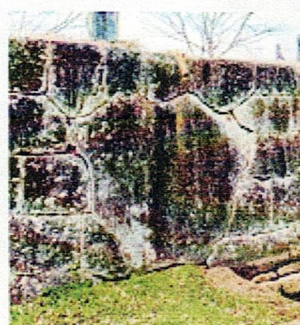
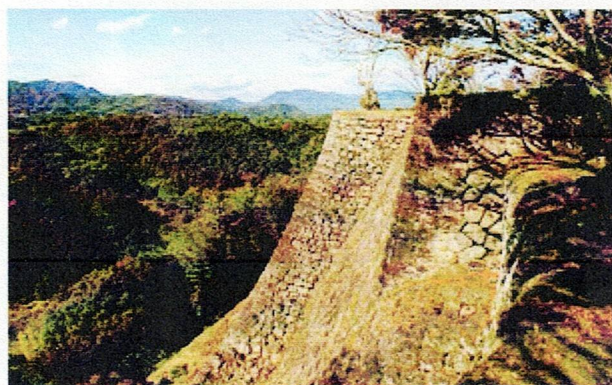
岡城跡について

奥豊後の山深く、稲葉川と白滝川に挟まれた断崖絶壁の地に、天高くそびえ立つ高石垣。広大な敷地に広がる山城『岡城』は、総石垣のまさに「難攻不落の堅城」です。岡城は、兄である源頼朝に追われた源義経を迎えるため、文治元年(1185)に緒方三郎惟栄が築城したという伝説にはじまります。

時は流れ、やがて岡城は豊後国守護大友氏の一族である志賀氏の居城となります。天正14年(1586)、薩摩の島津義弘率いる大軍が、志賀親次の守る岡城を攻撃します。島津軍は、険峻な要害である岡城を落とすことができずに撤退し、岡城は「難攻不落の城」として世に広く知られるようになりました。その後、豊臣秀吉の朝鮮出兵で主家の大友氏が失脚すると、志賀氏はこの地を去ることとなりました。代わって中川氏が岡城の城主となり、明治4年(1871)の廃藩置県により城を去るまでの277年間、岡城は中川氏の居城となりました。中川氏の時代に岡城の大改修が行われ、要害堅固な地形を土台とした総石垣の広大な近世城郭へと変貌していきました。

明治になり、廃城令の施行に伴い役目を終えた岡城の建造物は、明治7年(1874)に競売にかけられ、石垣のみが残る城跡になりました。少年時代を竹田で過ごした瀧廉太郎は、岡城をモデルにして名曲『荒城の月』を作曲したと云われています。阿蘇くじゅうの山々や祖母山を遠方に望む岡城跡では、雄大なスケールの石垣と、四季折々に変化する自然が織りなす唯一無二の景色を楽しむことができます。岡城の悠久の歴史に想いを馳せ、あなただけの岡城を発見してみてください。

現在は、残された石垣や礎石などの遺構から、かつての岡城の姿を知ることができます。



最強の石垣

Stone wall

難攻不落の堅城と謳われる岡城、その所以は周囲を囲う断崖絶壁と、その絶壁上に累々と築かれている石垣群です。近世初頭、中川氏により総石垣の城郭へと改修された岡城は、断崖絶壁上に石垣で取り囲み、その上に塀や櫓などの建物が立ち並ぶ大城郭でした。中でも、主郭部である三の丸北側から二の丸にかけて続く絶壁上に築かれた高石垣は、壮大さと美しさを生み出しています。

岡城で見ることができる石垣は、石の加工や石の積み方まで、いくつかの種類に分類されます。また、鏡石と呼ばれる巨石、刻印のある石、石材を切り出した際にできた矢穴跡など、特徴のある石を探しながら城内散策することも石垣の魅力の一つと言えるでしょう。



三代藩主 中川 久盛 (1594-1653)

基本法制を整備し、藩の基礎づくりを行う。三佐(現在の大分市三佐)の船着場のほか、碧雲寺や顯成院を造営、八幡山に愛染堂を建立した。



三代藩主 中川 久清 (1615-1681)

久清は岡藩中興の英主で、検地を行い諸制度の改革を行った。また、岡山藩より熊沢蕃山を招き、その献策により植林や用水路づくりなども行った。



八代藩主 中川 久貞 (1724-1790)

岡城の大半が焼失した天明8年(1771)の大火をはじめ、多くの天災に見舞われる。領土は荒廃、藩の財政は悪化したため、様々な改革を行った。



十代藩主 中川 久貴 (1787-1824)

大和郡山藩柳沢保光の五男。文化元年(1804)、田能村竹田らがまとめた『豊後国志』を幕府に献納し、岡藩の学問水準の高さを知らしめた。



初代藩主

ひでしげ
中川 秀成
(1570-1612)

直入郡・大野郡六万四千石(後に七万石)の領主となり、岡城の大改修、城下町の建設に着手。秀成は、関ヶ原や佐賀関の戦いで功績により、徳川家康から所領を安堵された。秀成の正室は、賤ヶ岳の戦いで父清秀を討った佐久間盛政の娘虎姫である。

◆ 歴代藩主

初代 秀成

二代 久盛

三代 久清

四代 久恒

五代 久通

六代 久忠

七代 久慶

八代 久貞

九代 久持

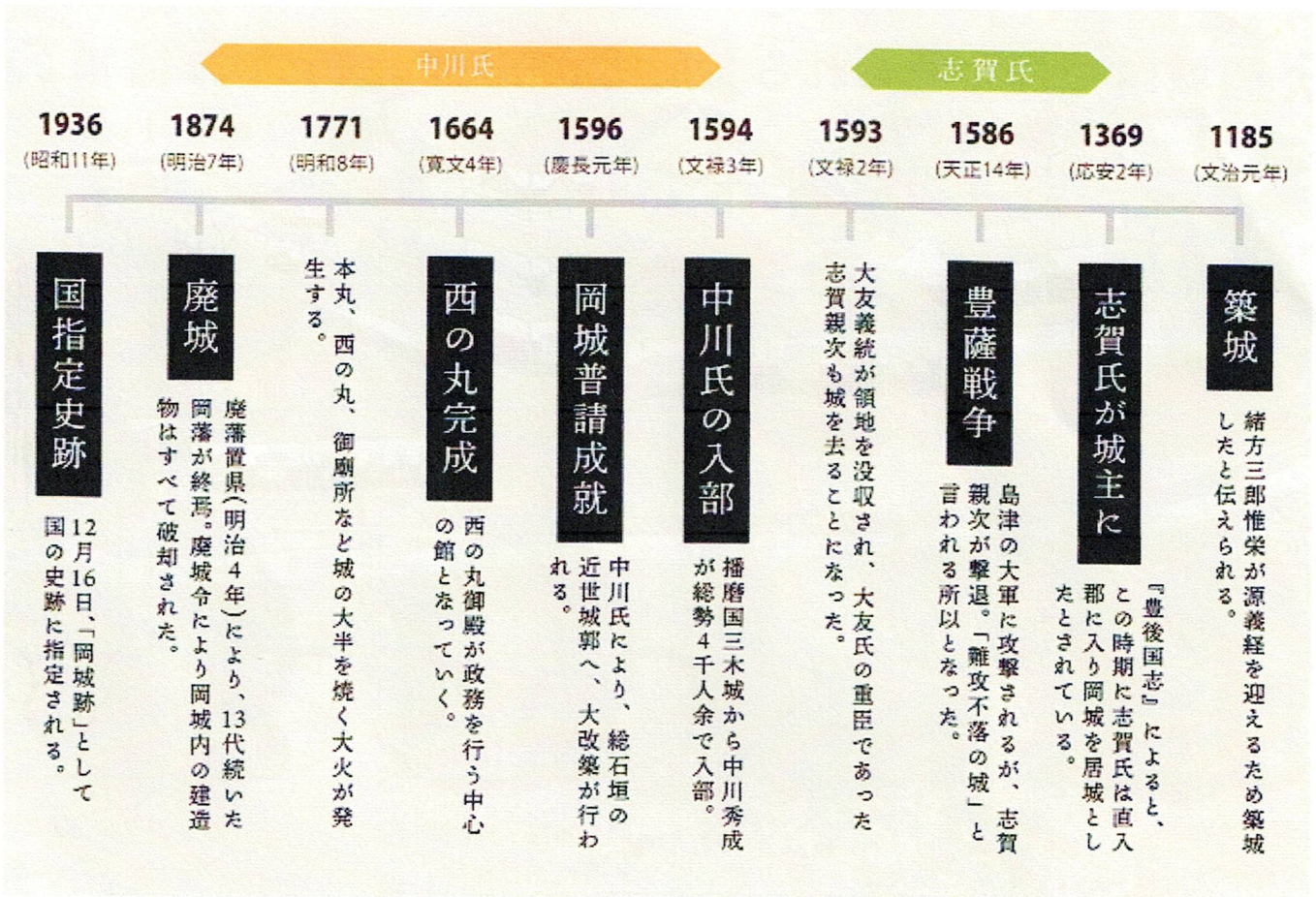
十代 久貴

十一代 久教

十二代 久昭

十三代 久成

岡城の歴史と歴代の藩主たち



⑥大分府内城 16時40分～17時10分



大手門 内にて



上 到着櫓



下 西の丸角櫓



府内城跡

(ふないじょうあと)

funai jou ato

府内城の歴史

大分市荷揚町に所在する「府内城」(荷揚城)は、大分川と住吉川(毘沙門川)の河口部に築かれ、本丸、二ノ丸(東ノ丸、西ノ丸)、三ノ丸(武家屋敷地)と城下(町屋地)からなっています。

府内城の築城は、大友氏が国を去った後、府内領主の早川長敏に続いて府内に入った福原直高が秀吉から命を受け、慶長2年(1597)に着手されました。その後、城づくりは竹中重利に引き継がれ、家康の許可を得て、本丸、二ノ丸と北ノ丸、三ノ丸が慶長7年(1602)に完成しました。さらにその外側には堀(外堀)で碁盤目状に区画された四十余りの町が造られました。今の大分市街地のおおよその形状は、この頃に造られたものです。

城下は、北方が海に、東方が大分川河口に面しており、高低差の少ない平坦な形状で、東西10町(約1200m)、南北9町(約950m)の範囲に本丸と二ノ丸、武家屋敷である三ノ丸、町人が暮らす町人町を四重の堀で防御した堅固

な構えとなっていました。明治末頃、城下外側の堀(外堀)と三ノ丸外側の堀(中堀)と二ノ丸内側の堀(内々堀)は埋め立てられ、現在では、二ノ丸と三ノ丸を隔てる堀(内堀)のみが残されています。

かつては、天守は4層で、23の櫓と5つの門、3カ所の廊下橋が築かれていましたが、火災や戦災などにより殆どが失われてしまいました。現存する「宗門櫓(しゅうもんやぐら)」と「人賞櫓(ひとじちやぐら)」の2つの櫓は、県指定文化財となっており、江戸時代の意匠を今に伝える貴重な史跡となっています。また、堀の石垣や土塀なども県指定文化財として、それ以外の部分は市指定の史跡として保護されています。

現在、これら「府内城跡(ふないじょうあと)」を含む周辺一帯は、「大分城址公園」の名で、市民の憩いの場として広く親しまれています。

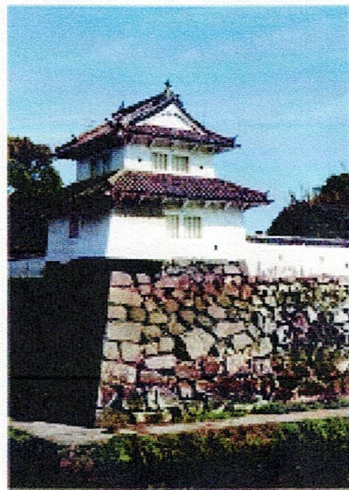
府内城 歴代城主

1 福原 直高	慶長 2年～慶長 4年 (1597年～1599年)	9 松平 近貞	享保 3年～延享 2年 (1718年～1745年)
2 早川 長敏	慶長 4年～慶長 5年 (1599年～1600年)	10 松平 近形	延享 2年～明和 7年 (1745年～1770年)
3 竹中 重利	慶長 6年～慶長19年 (1601年～1614年)	11 松平 近備	明和 7年～享和 4年 (1770年～1804年)
4 竹中 重義	元和元年～寛永11年 (1615年～1634年)	12 松平 近藤	享和 4年～文化 4年 (1804年～1807年)
5 日根野 吉明	寛永11年～明暦 2年 (1634年～1656年)	13 松平 近訓	文化 4年～天保 2年 (1807年～1831年)
6 松平 忠昭	万治元年～延宝 4年 (1658年～1676年)	14 松平 近信	天保 2年～天保12年 (1831年～1841年)
7 松平 昭重	延宝 4年～宝永 2年 (1676年～1705年)	15 松平 近胤	天保12年～明治 4年 (1841年～1871年)
8 松平 近輔	宝永 2年～享保 3年 (1705年～1718年)		

現在の府内

1 人質櫓

寛保3年(1743)の大火により、天守をはじめ城内の多くの建物が焼失し、現在の人質櫓は、文久元年(1861)に再建されたものです。府内城は、寛保3年の大火の後も明和6年(1769)の大地震、安政元年(1854)の大地震、また昭和20年(1945)の空襲で多くの建物が損壊されたため、江戸時代の建物としては、この人質櫓と宗門櫓のみとなっています。



2 宗門櫓

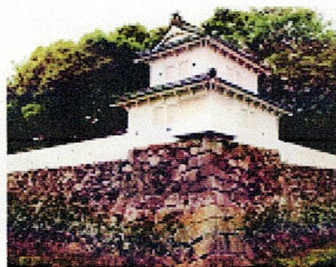


人質櫓とともに江戸時代の城郭建築が残る県内で数少ない一つです。安政元年(1854)に発生した安政大地震で壊れ、幕府の許可を得て、安政6年(1859)に再建されたものです。

城外からは平櫓に見えますが、城内からは二重(二階建)に見える建物です。元々は櫓の北壁にも石垣が延びており、その部分に階段がありましたが、明治時代に取り壊されてしまいました。現在は、建物北壁の上階にある屏が、当時の面影を残しています。

3 着到櫓

東ノ丸の南西隅にある二重櫓で、明治維新後、昭和20年(1945)の大空襲で焼失するまで存続していました。現在あるのは、昭和41年(1966)に建築されたものです。

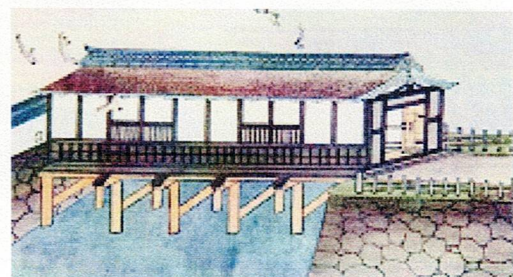


4 廊下橋

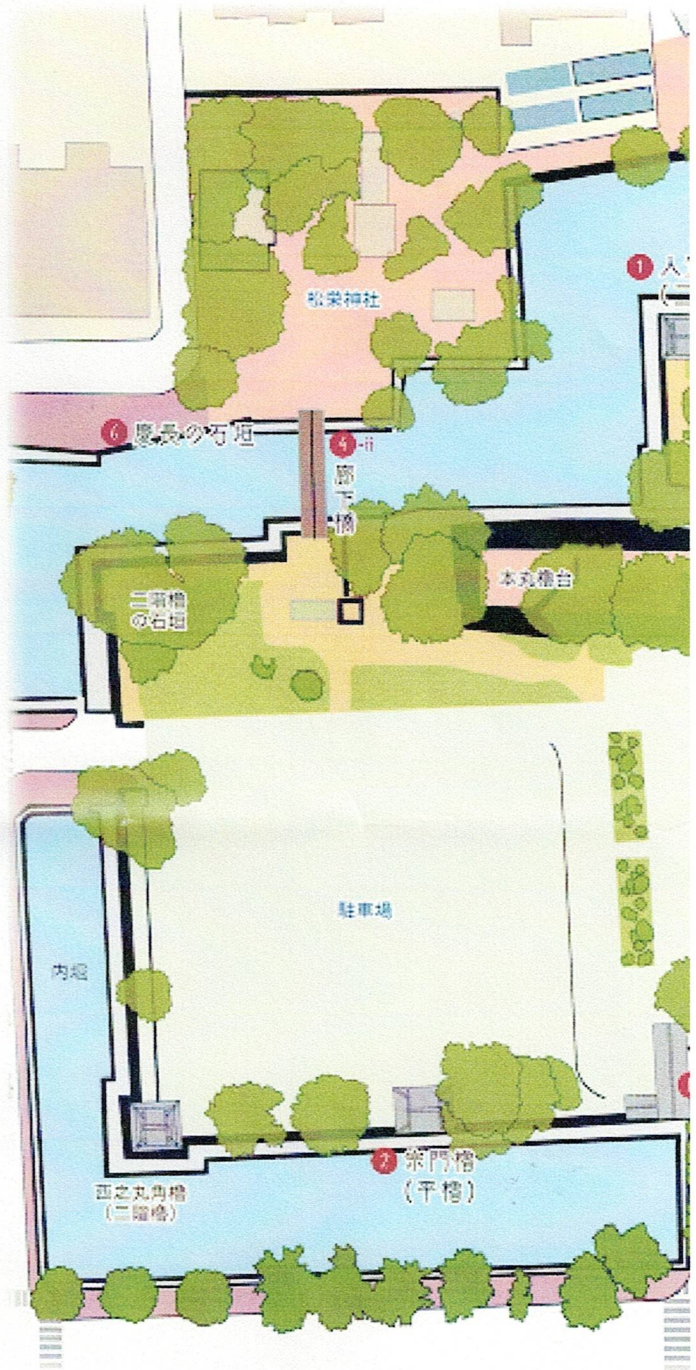
府内城には、3箇所に廊下橋が架けられていました。Ⅰの大手門をはじめ、Ⅱに記載した西之丸から北ノ丸、そして本丸から東ノ丸への3箇所の廊下橋です。

Ⅰ 大手門の廊下橋

三ノ丸から二ノ丸の大手門に通じる内堀との間は、現在は通路となっていますが、元々は廊下橋があった所です。明治時代に埋められてしまいました。



松葉神社 所蔵

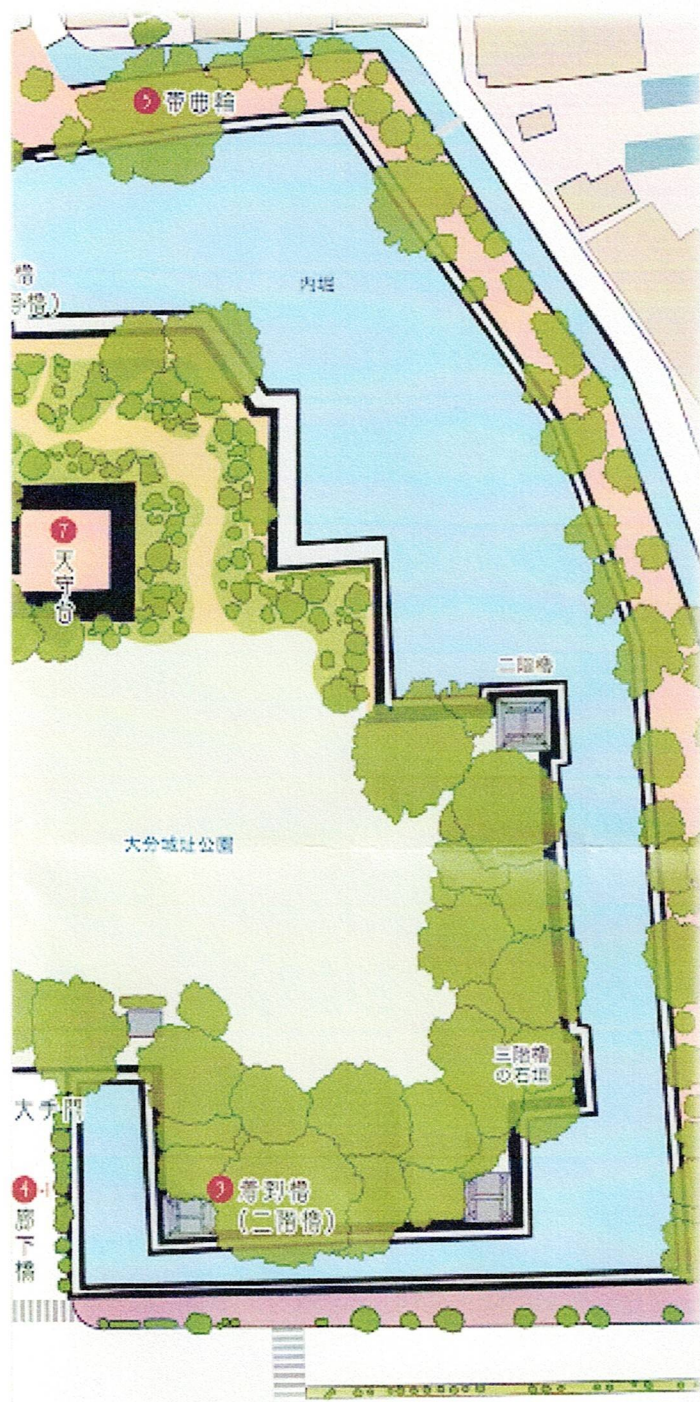


現在の府内城は、寛保3年の大火の後も明和6年の大地震、安政元年の大地震、また昭和20年の空襲で多くの建物が損壊されたため、江戸時代の建物としては、この人質櫓と宗門櫓のみとなっています。

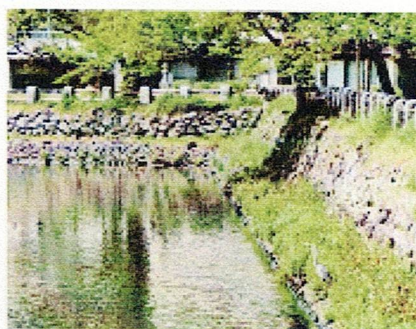
寛保3年(1743)の大火により、天守をはじめ城内の多くの建物が焼失し、現在の人質櫓は、文久元年(1861)に再建されたものです。

Ⅱ 西之丸から北ノ丸、そして本丸から東ノ丸への3箇所の廊下橋です。

大分城の地図



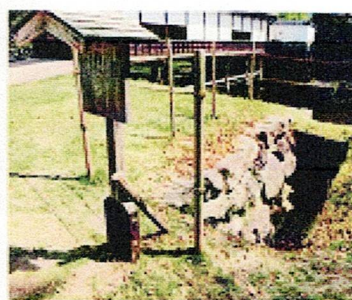
5 帯曲輪 (おびぐるま)



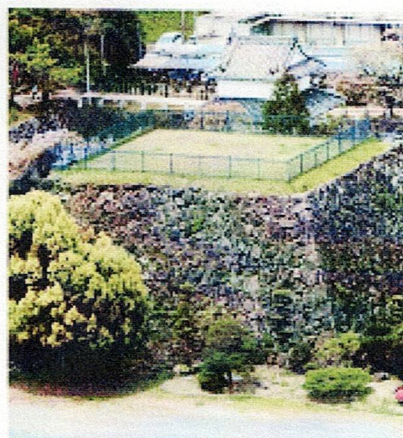
大分城址公園の東から北東側の桜非木のある場所は、江戸時代に大分川の河口に造られた人工の土手で石垣が巡っています。現在は、東ノ丸との間の内堀が一部埋められ、帯曲輪の東側も埋め立てられてしまいました。

6 慶長の石垣

平成7年、北ノ丸と西ノ丸を繋ぐ廊下橋復元に伴う発掘調査によって確認された北ノ丸の石垣です。調査終了後も見ることができるよう整備されています。現在あるのは、昭和41年(1966)に復元されたものです。



7 天守台



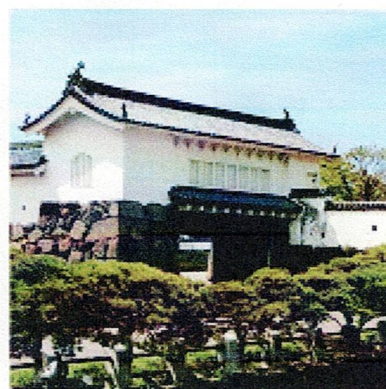
慶長7年(1602)に四重櫓の天守閣が築かれましたが、寛保3年(1743)の大火により焼失しました。以降再建されることなく、現在に至っています。

また、本来天守に取り付け櫓などがありました。明治以降に取り壊されてしまいました。

8 大手門

府内城の玄関口にあたるため、大手門と呼ばれていますが、正確には「多間櫓門(たもんやぐらもん)」という名称です。

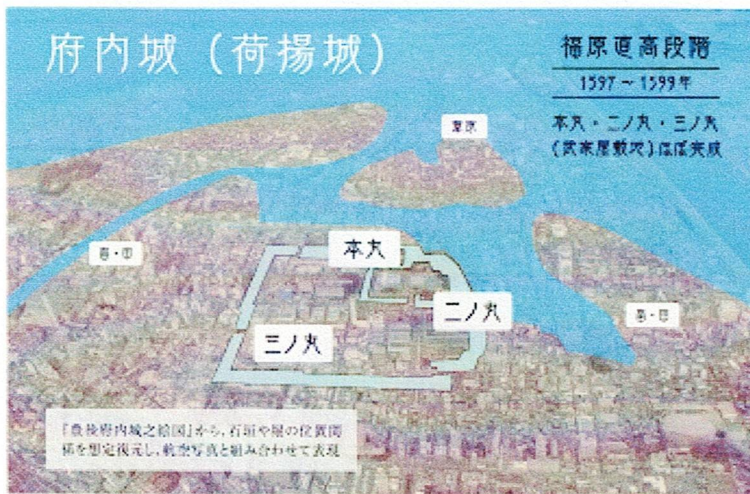
昭和20年(1945)の空襲により焼失し、現在の建物は昭和41年(1966)に整備建築されたものです。



ノ丸の廊下橋

つて、茶の湯や能、月見新芸能の営まれた山里丸(丸の一部)と西ノ丸を結び廊下で、平成8年に復元されました。左の絵図に描っていた大手門廊下橋のが元になっています。





福原直高段階
 (1597-1599 / 慶長2~4年)

福原直高は、豊臣秀吉の命を受け、「荷落(におろし)」と呼ばれていた河畔を築城地に定め、慶長2年(1597)に、本丸、二ノ丸、三ノ丸が完成しました。直高は、「荷落(におろし)」の地名を継い、「荷揚(にあげ)城」と名付けました。

その後、徳川家康により領地を没収され、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦い後、竹中重利が家康の命で2万石の府内城主となりました。

このため、城づくりは、竹中重利に引き継がれました。

竹中重利段階
 (1601-1614 / 慶長6~19年)

竹中重利は、慶長7年(1602)から、家康の許可を得て、4層からなる天守をもつ本丸、城主の御殿となる二ノ丸と北ノ丸、武家屋敷の三ノ丸まで完成させました。

その際、石垣の築造に加藤清正の石工数十名を派遣してもらいました。さらに、大阪や伏見から大工や瓦師を招くなど、当時の城造りの先端技術を導入しました。

城郭が完成すると三ノ丸の外側に碁盤目状に四十余りの町が造られ区画し城下町としました。

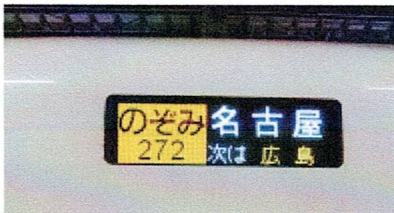
慶長10年(1605)には、城下を囲む外堀が完成し、慶長12年(1607)に城下への出入り口として、堀川口(北西)、笠和口(西)、堀丸升口(南東)に門と番所を設け、物資や人の出入りを監視しました。慶長13年(1608)、城下の北西に商船が出入りする京泊と呼ばれる船着場が造られ、水上交通や物資の輸送を担っていたと考えられます。

こうして、直高の築城開始から完成まで11年間を要して完成しました。



竹中重利段階
 1602~城郭の増設
 1607年城下町完成
 1608年京泊等完成

小倉 20時 17分発—<新幹線「のぞみ」 御朱印 は4つ 他はなし



- ②飢肥城下町は時間をかけてもう一度訪れてみたい所です。
- ③人吉城で日本百名城の御城印を押印され、8年かけて達成された方がいた。拍手
- ⑤大分の岡城は大きな岩盤の上にあるお城跡で別名、地名から竹田城と言われています。
- ⑥今回の目的は府内城3代城主竹中重利(竹中半兵衛の従兄弟)の業績を知りたく参加したツアーでした。HPの「竹中一族の略系図」参照をください。リンクしてあります。雨の中の見学が多くて残念であったが、見学した六城の歴史をガイドさんから知ることができた有意義であった。